

『平家物語』合戦譚考

——頼朝拳兵譚・一谷の合戦 延慶本・覚一本をめぐつて——

生 形 貴 重

1・はじめに —— 盛俊最期 ——

『平家物語』巻九に描かれる一谷の合戦には、様々な人々の最期が語られている。なかでも平氏の侍大将越中前司盛俊の最期は無惨である。今、盛俊の最期をみることから、問題をとらえることにする。

「今はおつともかなはじ」と討死を覚悟した盛俊は、猪俣小平六則綱に組み合い、彼を押し伏せ、今にも首を掻こうとする。盛俊は、則綱の「理をまげて則綱をたすけ給へ。御へんの一門なん十人もおはせよ、則綱が勲功の實に申かへてたすけ奉らん」という助命の懇願に対し、「大いにいかゞして」

盛俊身こそ不肖なれ共、さすが平家の一門也。源氏にたのまうどは思はず。源氏又盛俊にたのまれうどもよもおもはじ。に

(こ)くい君が申様哉

と、その願いを拒絶する。自らの死に場を定め、死の一瞬に至るまで平氏の侍大将としての自己を燃やし尽くそうとする盛俊の執念が、「さすが平家の一門也」という言葉の中に、力強く籠められているといえよう。しかし、則綱の「まさなや、降人の頸かくやうや候」という一言に、則綱を助けた盛俊は、今度は則綱に「水田へのけにつきたを」され、あえなく首を掻かれてしまう。

同様の死に様は、己れの子息に似ているが故に助けた入善小太郎行重に討たれた高橋判官長綱の場合にも語られている。(巻七「篠原合戦」)

あなむざん、去年をくれし長綱が子も、ことしあらば十八歳ぞかし。わ君ねじきゞしてすつべけれ共、たすけん

という、人の親としての情故に、敵に討たれた長綱の場合も、先の

盛俊と同様、一片の人間の情の付け入る隙もない戦場の現実と、そうした死に様故にくっきりと浮かび上がってくる彼等の人間像とを、あますところなく伝えているといえるだろう。

死という人間存在の否定そのものが語られるとき、死にゆく者の人間性が初めて強烈に浮かび上がってくる、そうした非情で残酷な変革期固有のはかなく厳しい人間存在のあり方が描かれているといえるだろう。

さて、盛俊の最期は、

日来鬼神と聞えつる平家の侍越中前司盛俊をば、猪俣小平六則綱がうごさしたるぞや

という、則綱の高らかな声で完結する。が、それは、盛俊個人の死を描くことに留まらず、一門総崩れとなる戦況をも同時に表現している。

つまり、この盛俊最期は、一方で戦場におきた一武将の最期の悲劇を描きつつ、他方、忠度・重衡・敦盛・知章等々、うち続く平兵衛達の悲劇を導き出すものとしてもあり、そういう意味で、すぐれた叙事詩的構成の一部を形作っているといえる。

覚一本の右のようなすぐれた文学的表現に対して、今、延慶本の記事を対比してみよう。延慶本の記事をみると、覚一本と比較してきわめて重要な相違点があり、合戦譚に共通して存在するのではない

『平家物語』合戦譚考

かと思われるのである。

すなわち、第一に注目すべき点は、延慶本では、則綱の助命の懇願に対して、盛俊が次のように応じている点である。

サソカシ盛俊ハ子供アマアリ女子男子ノ間ニ廿余人候サラハ
助給ヨ一定カ

つまり、延慶本には、覚一本にみられるような決死の思いで戦場に踏み止まる英雄的な盛俊像はなく、むしろ、味方の敗戦という現実の中で、いかに一族の保身の術をみつけるかに腐心する小領主としての盛俊像が描かれているのである。

しかもまた、延慶本の盛俊の最期は、覚一本にみられるような形では完結せず、むしろ盛俊を討ち取った側の則綱の功名譚として語られている点に注目される。つまり、盛俊にいったん助けられた則綱は、盛俊と二人で休息をとるが、そこに源氏方の武士猪俣党の人見四郎が落ち合う。則綱は、

人見四郎待付テ討タラハ二人シテコソ討タレトイワムス

と思い、即座に盛俊の首を掻くが、肝心の功名の証である首を多勢の人見四郎に奪われる。しかし、則綱は後日の為に盛俊の耳を切り取っておき、首実検の場で再び功名を彼の手に取り戻すのである。

以上が延慶本の盛俊の最期のあらましであるが、明らかに延慶本の記事は、覚一本のそれと異なり、則綱の知略を称讃しその功名を

語り伝える点に主眼点があるといえるだろう。この延慶本の記事に古態性が認められようことについては、すでに富倉徳次郎氏らの指摘があり、今ここで触れない。しかし、功名の為に盛俊を欺き、耳を切り取るといった凄惨な叙述から、逆に討ち取られた盛俊の哀しい最期と侍大将としての彼の人間像を描く叙述へという、両諸本の相違は重要である。討ち取った側から討ち取られた側へという叙述の主眼の移行は、合戦譚における増補系諸本と語り系諸本との基本的な相違と思われるのである。

そういう意味で、『平家物語』が語られるにつれて、その合戦譚をすぐれた文学的表現に高めてゆく道筋は、『平家物語』の文学性や竟一本の評価についても、重要な足がかりを与えてくれるはずである。本稿は、そうした点について、語り系諸本では略述されている頼朝挙兵譚と、一谷の合戦とを素材にして、延慶本・竟一本の叙述を中心に検討し考察してみようとするものである。

2・頼朝挙兵譚

いわゆる増補系諸本には、語り系諸本では略述されている頼朝挙兵譚が記されている。

『平家物語』諸本を大別する最も顕著な点はこの点にある。^⑤

と市古貞次氏が指摘するように、この相違は、たんに記事の有無と

いう問題にとどまらず、語りものとしての『平家物語』を考える上でも重要な点と思われる。そこで、まず頼朝挙兵譚を、延慶本の記事をもとにして、その概要を表にまとめて考察することにする。

(-) 頼朝挙兵譚(延慶本第二末・巻五) 概要	備考
<p>佐々木者共佐殿ノ許へ参事</p> <p>1 頼朝、院宣ヲ見テ北条時政ニ挙兵ヲ相談。北条・上総介広常・千葉介常胤・三浦介義明等ノ援助ガアレバ、事ハ必ズ成就スルト進言シ、敵対スル者トシテ、畠山重忠・稻毛重成・畠山重能・小山田有重ヲアゲル。</p> <p>2 頼朝、八月十五日ノ八幡大菩薩ノ放生会以降ニ挙兵スルコトヲ決意シ、日ヲ送ルトコロ、京ヨリ佐々木秀義ノ許ニ、頼朝挙兵ノ発覚ヲ、大庭景親ガ告ゲル。</p> <p>3 佐々木秀義、太郎定綱ヲシテソノ旨北条ニ告ゲサセヨウトスル。八月九日、定綱、頼朝ニ急報シ、二郎経高・三郎盛綱・四郎高綱ヲ具シテ、頼朝ノ許ニ参上。平家方ニ組ミスル豪族トノ縁者デアル二郎・四郎モ、喜ンデ頼朝方ニ参加。</p>	<p>「長門本」ホボ同文。「四部本」ハ、石橋山ノ合戦マデノ記事、キワメテ簡略ニ記ス。</p>
<p>(-) 屋牧判官兼隆ヲ夜討ニスル事</p> <p>1 八月十六日、佐々木兄弟、頼朝ノ許ニ参上。頼朝喜ビノ言葉ヲ述ベル。挙兵ハ十七日ト決定。</p> <p>2 頼朝ノ許ニ仕エル女ニ通ツテタル兼隆ノ雑色ヲ捕エル。ソレヲ機ニ、十七日子ノ刻、北条・佐々木ノ人々、三四十人デ、屋牧館へ進発。</p>	<p>「長門本」ホボ同文デアルガ、6ノ所ノ「延慶本」「法花経ヲ一字モヨマス加藤次カハ巻ノハテヲ今ミツルカナ」ノ歌、ナシ。「盛衰記」(-)</p>

	(三)	(四)	(五)	(六)
<p>3 伊豆国住人加藤景廉、事アルヲ察知シ、頼朝ノ許ニ参上。</p> <p>4 佐々木ノ人々、マズ兼隆ノ郎等権介兼行ノ家ヲ襲イ、兼行ヲ討チ、屋牧館へ進軍。</p> <p>5 頼朝、養兵成功ノ合図ガナイ為、加藤景廉ニ自ラ小長刀ヲ与エ、北条等ノ陣ニ遣ス。</p> <p>6 景廉、苦戦中ノ北条ノ陣ニ到着。景廉ノ奮闘ニヨリ、屋牧判官兼隆ヲ討ツコトガデキル。</p>	<p>兵衛佐勢ノ付事</p> <p>1 伊豆ノ在地ノ武士共、多ク頼朝方ニ付ク。</p> <p>2 頼朝、味方ノ中心デアル北条時政・土屋宗遠・土肥実平等ヲ召シ、今後ノ事ヲ評定。</p>	<p>兵衛佐国々へ廻文ヲ被遣事。</p> <p>1 実平ノ提言ニヨリ、国々へ廻文ヲ遣ス。</p> <p>2 上総介広常・千葉介常胤・三浦介義明等、頼朝勢ニ加ワル事ヲ約束。</p>	<p>石橋山合戦事</p> <p>1 八月廿三日、伊豆・相模ノ住人三百余人ノ勢ヲ、頼朝、石橋ニ布陣、大庭景親・侯野景尚等、平家ノ方ノ武士共三千余騎ヲ、石橋ヲ攻メル。</p> <p>2 三浦ノ一族ノ佐奈多与一義忠ノ奮戦。侯野五郎、義忠ヲ討チ取ル。頼朝ノ軍勢、多ク討死。頼朝、相山ニ逃レル。</p> <p>3 頼朝、一時味方ノ人々ヲ分散。北条父子ハ甲斐国へ。頼朝ニハ土肥実平等、七騎ガ従ウ。</p>	<p>小笠坂合戦事</p> <p>1 三浦ノ一族ノ人々ハ、頼朝ノ石橋山デノ敗戦ヲ知り、自害セントスルガ、三浦義澄ノ頼朝生存ヲアクマデモ信ジル言葉ニヨリ、再ビ</p>
<p>ノ後、「小児諷諭」ノ記事ヲ増補。</p>	<p>「四部本」ナシ。</p>	<p>「四部本」ナシ。</p>	<p>「長門本」、2ノ後ニ、伏木ニ隠レル頼朝ヲ、梶原源太景時ガ助ケル説話ヲ載セル。「盛衰記」、ソノ他異朝本朝ノ故事等ヲ増補。「四部本」記事ノミ記シ、内容ニアタル本文ナシ。</p>	<p>「四部本」ナシ。</p>

	(七)	(八)	(九)	
<p>進軍。</p> <p>2 三浦ノ軍勢、畠山重忠ノ軍勢ト合戦。三浦義茂ノ功名ニヨリ、畠山ノ軍勢ヲ破ル。</p>	<p>衣笠城合戦事</p> <p>1 三浦ノ一族ノ人々、大介義明ノ言葉ニヨリ、衣笠城ニ籠ル。</p> <p>2 武蔵国住人江戸太郎、郎等ヲ具シ衣笠城ヲ攻撃。苦境ニ立ツ三浦ノ人々ハ、老將義明ノ言葉ニヨリ、頼朝ニ再会セント、衣笠城ヲ落ち、安房上総ノ方ニ脱出。</p> <p>3 城ニ一人残ランコトヲ主張ス義明ヲ、三浦ノ人々無理ニ輿ニ乗セ城ヲ出ル。シカン、栗浜ニテ義明ノ輿ヲ昇ク雑色共、追手ヲ恐れテ逃亡。ソノ為ニ義明、不運ノ死ニ様ニアウ。</p> <p>4 山中デ、頼朝ニ従ウ土肥実平ハ、伊東入道ガ土肥ノ郷ヲ焼ク火ヲ遙方ニ眺メ、ソレヲ八幡大菩薩ノ加護ト述ベル。</p>	<p>兵衛佐安房国へ落給事</p> <p>1 土肥ノ許ヨリ、三浦ノ人々ガ安房ニ落チタトノ連絡ガ、頼朝ニ届ク。頼朝一行、三浦・千葉ノ人々ト合流セントシテ、船ニテ安房へ。</p> <p>2 頼朝、船ニ乗ラントスル時、ソノ地ノ古老一行ノ人々ニ烏帽子ヲ献ジル。頼朝、コノ古老ニ将来勲賞ノ事ヲ約束スル。古老ソノ事ヲ咲ウ。</p> <p>3 出発ノ際、土肥実平ノ子息遠平、追手ノ舅ニアタル伊東入道ノ事ヲ氣ガネシ、出発スルコトヲ迷ウガ、人々、船ニ乗り出発。</p>	<p>土屋三郎與小二郎行合事</p> <p>1 北条時政ハ甲斐国へ赴ク。</p> <p>2 頼朝、土屋三郎宗遠ヲ甲斐国へ派遣。山中デ、土屋、養子ノ小二郎義治ガ京ヨリ帰国ス</p>	
<p>「四部本」ナシ。</p>	<p>「四部本」ハ、3ノ所、近藤七国平ガカワツテ乗船シタト記ス。</p>			

(ト)	(ニ)	(ハ)
<p>ルノト出会ウ。土屋、小二郎ヲ味方ニスル為 アエテ不利ナ戦況ヲ語ラズ、小二郎ノ同行シ テ甲斐国ヘ。</p>	<p>三浦ノ人々兵衛佐ニ尋入合奉事 1 三浦ノ人々、安房国龍ヶ磯ニ着ク。シバラ クテ、沖ニ一艘ノ船ガ出現。頼朝ノ船ト分 カル。 2 船中ノ頼朝、ナオ用心シテ船底ニ身ヲ潜メ ル。三浦ノ人々、頼朝ノ部下ト、今日マデノ 合戦ノ苦勞ヲ物語スル。頼朝、コロアイヲ見 テ、笑ヲ現ワス。 3 三浦ノ人々、頼朝トノ再会ニ感涙ヲ流ス。 4 頼朝、安房国安州大明神ニ参詣。ソノ夜、 神ノ加護ノ奇瑞ガアル。 5 頼朝、上総介広常・千葉介常胤ニ使者ヲ送 ル。常胤、三千騎ヲ具シ頼朝ト合流。頼朝等 下総ノ国府ニ入ル。千葉常胤ノ帰参ニヨリ、 在地ノ豪族達モ次々ト頼朝方ニ帰ス。</p>	<p>上総介広常佐殿ノ許参事 1 広常、当国ノ平家方ノ武士ヲ討チ從エテ、 上総国ノ国府ニテ頼朝ト合流。頼朝ノ軍勢 一万六千余騎トナル。 2 頼朝、土肥実平ヲ遣シ、広常ノ参陣ヲタタ エル。広常、ソノ頼朝ノ態度ニ感激。將門ト 比較シ、頼朝ノ器量ノ境住ナラヌ事ヲ知ル。 3 頼朝、武蔵・下総国ノ境住田川ニ布陣。カ ツテ敵方デアツタ江戸・葛西ノ人々モ頼朝ニ 帰服、サラニ軍勢ヲ増シ、野川ノ板橋ニ布陣。</p>
<p>「盛衰記」ハ、コ ノ後ニ「大庭早 馬」ノ記事ヲ置ク</p>	<p>「四部本」ハ、2 ノ記事ナン、「盛 衰記」ハ、3ノ記 事ヲ後ニ置ク(卷 廿三ハ)</p>	<p>「四部本」ハ、俣 野五郎景久ノ助命 ノ記事アリ。マタ 島山ニ与エル旗ヲ</p>

<p>ノ由来ヲ語り、彼等ガ源家ニユカリ深い者達 デアルコトヲ説ク。 3 頼朝、千葉・土肥ニ相談ノ上、島山ノ旗ニ 藍革ヲ与エル。 4 大庭景親、孤立シ、相模国ノ山中ニ逃亡。 5 頼朝等、平家ノ追討軍ノ到来ヲ待ツ。平維 盛ノ軍勢、京ヲ発進。</p>	<p>「赤革」トスル。 (備考付加) 「四部本」ハ、拳 兵ノ記事ノ前半部 ヲ、「早馬」ノ記 事ノ前ニ置キ、シ カモ年代記風ニ記 ス。ソノタメ、 「早馬」ト記事ガ 重複。「長門本」ト ホボ同文脈デアル。</p>
--	--

右にあげた頼朝拳兵譚について、注意すべきいくつかの特徴をま
ずとりあげてみ、その成り立ちを考えてみよう。

まず第一に気づく点は、この拳兵譚が、頼朝の拳兵から関東の平
定に至るまでを、きわめて整然とした構成で描いている点であるう。
すなわち、拳兵を決意した頼朝に対して、北条四郎時政は次のよう
に述べている。(一ノ一)

上総介八郎広経千葉助経胤三浦介義明此三人ヲ語ラセ給ヘ此三
人タニモ随付マイラセ候ナハ土肥岡崎懐鳴ハ本ヨリ志思ヒ奉ル
者共テ候ヘハ参候ワンスラム若シ君ヲツヨク射マヒラセ候ワム
スルハ島山庄司次郎重忠同従兄弟稲毛三郎重成是等カ父島山庄
司重能同舎弟小山田別当有重兄弟二人平家ニ仕ヘテ京ニ候ヘハ
ツヨキ敵ニテ候ヘシ相模国ニハ鎌倉党大庭景親三代相伝ノ御家

人ニテ候へトモ當時平家ノ大御恩者ニテ候之間君ヲ可ク奉背者
ニテ候広常経胤義明是等三人タニモ参候ナハ日本国ハ御手ノ下
ニ思食へシ

きわめて流動的であつた関東武士団の勢力分析が、時政によつて的確に述べられていたのである。千葉・三浦氏という関東屈指の豪族の支援さえあれば、事は必ず成就すべきこと、そして畠山・大庭氏という勢力が敵対するであろうことが、あたかも予言の如く時政によつて整然と語られている。これらのことがらは、たとえ貴種であれ一介の流人が惹き起こす前途多難な挙兵の前夜にあつては、むしろ見通し難いものであらう。つまり、この時政の言葉は、挙兵成就した後、それを回顧できる時点に立つて初めて言うことのできるものである。それを裏付けるように、頼朝挙兵譚は、屋牧判官館への夜襲に始まり、次に三浦氏の動向に眼が向けられ、ついに千葉氏の帰参でその勝利が確定的になる、という具合に構成されているのである。しかもまた、頼朝が苦境に立つた際には、それが八幡大菩薩の加護と解されたり(七ノ四)、三浦一族との合流の後、安房国安州大明神に参籠の際には、奇瑞が起こる(四ノ四)という具合に、頼朝の行動の背後には、神意が認められる。たとえば、石橋山の合戦に破れ、山中に逃亡した頼朝に土肥実平は、次のように語りかけている。兵衛佐ハ土肥ノ鍛冶屋カ入ト云山ニ籠テオウシケルカ峯ニ見遣

『平家物語』合戦譚考

ケレハ伊東入道土肥ニ押寄テ真平カ家ヲ追捕シ焼払ケリ真平山ノ峯ヨリ遙ニ見下テ土肥ニ三ノ光アリ第一ノ光ハ八幡大菩薩ノ君ヲ守奉リ給御光也次ノ光ハ君御繁昌アテ一天四海ヲ耀シ給ワムスル御光也次ノ光ハ真平カ君ノ御恩ニ依テ放光セムトスル光ナリトテ舞カケテケレハ人皆咲ケリ

逆境に立たされることが、将来の成功を神の意志にもとづいて約束するのである。奇跡的な勝利が確定したとき、その勝利を神の意に沿つたものとして解釈する、そうした前近代特有の論理が認められるのであり、このような神意をあえて描いてゆくことは、頼朝の勝利への軌跡を神意によつて説明づけようとする一種の物語的な構想であるといえよう。

つまり、この挙兵譚は、先述の時政の予測に忠実に整然と構成されているのであり、いかえれば、頼朝挙兵譚は、たんに記録や説話の羅列ではけつしてなく、一定の小作品ともいえるまとまりを有しており、武久堅氏も論じているように、『平家物語』に加えられ以前に関東において一まとまりの物語としてあつたと十分に推測されるのである。

それでは、この挙兵譚はどのようにして成り立っているのだろうか。その点で最も注目すべきは、頼朝の描かれ方である。つまり、これらの記事は、全体として頼朝の関東平定に至る経緯を、整然と

した構成で描いているにもかかわらず、実際の描写においては、頼朝の行動を直接描くことはきわめて少なく、むしろ頼朝とともに立ち上がった佐々木・土肥・三浦・千葉氏といった在地領主達の英雄的な戦いぶりを通して構成されているのである。すなわち、頼朝拳兵譚は、彼をとりまく武士達の行動を通して、常に新たな状況へと展開してゆくというふうな構成されているのである。

たとえば、今、拳兵譚の(一)の部分のみをみてみよう。拳兵を決意した頼朝のもとへ、佐々木兄弟が馳せ参じる所である。ここでも、その緊迫した場面が、頼朝の心境や行動に即して描かれるのではなく、あくまでも佐々木氏の視点から描かれている。たとえば、頼朝を討討せんとする大庭景親の意を知った佐々木秀義が頼朝にそのことを告げようとするところは、次のように語られている。

秀義浅猿ト思テ急キ宿所ニ帰リテ景親カ、ル事ヲコソ語申ツレト伊豆へ告申ムトシケルニ三郎ハ勘当ノ者也二郎ハ未佐殿ノ見知給ラス太郎行トテ下野宇都宮ニ有ケル太郎定綱ヲ呼テ

これは、拳兵当時の佐々木一族の状況とそれに伴う秀義の心理であり、この使者に定綱がきまるといきさつは、佐々木氏以外に知る由もないであろう。あるいはまた、佐々木定綱・経高・盛綱・高綱の四兄弟が、そろって頼朝の許に参ずるところも、二郎高綱が敵方の渋谷の聲であるため、頼朝から疑われていることが語られ、また兄

弟間においても、経高が「三郎ニモ四郎ニモナ告給ソソレハイカニモ思キルマシキ者也」と述べていることなどが描かれている。これは、佐々木氏の一族内の複雑な葛藤を述べたものであり、これら一族間の問題をのりこえて、四兄弟がともに頼朝のもとに参上したとする描き方は、明らかに佐々木氏に伝えられた伝承なくしてありえないであろう。

同様に、(二)における屋牧判官兼隆を討ち取る所も、当日頼朝の許に来て、屋牧館にかけつけ兼隆を討ち取った加藤景廉の功名譚としての内容になっている。

北条使者ヲ立テ兼隆ヲ景廉カ討テ候ナリト申タリケレハ兵衛佐サレハコソト宣ケリ景廉ハ非^{アケル}拳^ミニ戦^ミ功^ミ於^ミ当時ニ専^ウ残^セニ名望^セ後世ニという言葉によって、この記事が結ばれていることにも、屋牧判官館の夜襲の場面が、北条氏・佐々木氏の伝承とともに、加藤景廉の功名譚も加えて、伝承の重層的な構成によって成り立っていることがうかがえるのである。

そのような観点から、頼朝拳兵譚をみると、石橋山の合戦(四)は、頼朝方の先陣として討死した佐奈多与一義忠の武勇譚からなり、また、三浦氏の動向に沿って語られる小壺坂・衣笠城の合戦(六)(七)は、あくまでも頼朝の生存を信じつつ、頼朝との合流に至るまで死地の中を苦難と戦いつづけた三浦義明・義澄等、三浦氏の伝承であ

ることは明白である。あるいは、頼朝が安房へ落ちる所(八)も、たとえば四部本が実平の子息遠平が同船しなかつた理由として、近藤七国平を同船させたとする記事をのせて、味方の伊藤入道の智にあたる遠平を残したとする、より詳細な異伝を記すことにもられるように、土肥氏の伝承からなっていることが推測される。あるいはまた、頼朝の命で甲斐国へ派遣された土屋三郎宗遠が、山中で養子の義治に出会った際、戦況の不利を敢えて明かさず、うまく義治を味方に引き入れたこと(九)も、先の佐々木・土肥の場合同様、きわめて流動的な情勢のなかで、一族の離合集散を克服して戦いぬいた在地領主のあり様をよく伝えるものであり、土屋三郎の功名譚としてまとめられている。同様に、千葉経胤・上総介弘経の帰参や、畠山重忠の帰服(十・出・出)も、それぞれ千葉氏・畠山氏の伝承と認められる。^⑤

このように、一連の頼朝挙兵譚は、頼朝の挙兵に参加した、佐々木・三浦・千葉氏等、在地の領主階級の間で、それぞれの武勲を語り伝えるいくさがたりを基盤に成り立っていると考えられる。

草深い在地で人々が一族の武勲を永く語り継ぐいくさがたりを伝えていたことは、はやく武者小路穂氏が指摘している。^⑥あるいはまた、そうした武士達の功名譚を基盤にして、合戦譚が成立していることについても、水原一氏の先駆的なすぐれた研究がある。しかし、

頼朝挙兵にまつわるこの内乱期の語りは、その戦いに参加した武士達にとっては、新たな社会的な意味と価値を持つものであった。源平の内乱は、今や古代末期の政治的・社会的諸矛盾の集約であり、また、この戦いに参加する彼等武士にとっては、自らの功名が、頼朝という新たな権威によって、所領の獲得と安堵とを約束されるという戦いであった。東国武士の間で広く伝承されたこうしたいくさがたりは、彼等の新たな在地支配を説明し保証するべき語りとして存在していたと思われる。それ故に、この頼朝挙兵譚に留まることなく、宇治川合戦や一谷の合戦あるいは壇之浦の合戦等、『平家物語』に描かれる合戦譚の基盤をなす多くのいくさがたりは、王朝社会にとって、歴史的・政治的意味をきわめて顕在化しつつ、『平家物語』作者の前に堆積したはずであり、作品の世界を、平家の物語からより広い歴史的視野を獲得した叙事詩的作品へと変容させたものと思われる。『平家物語』の成立事情を暗示する『徒然草』や『醍醐雑抄』の記事が、

武士の事・弓馬のわざは、生仏、東国の者にて、武士に聞聞て書かせけり(『徒然草』)

合戦之事。依^レ無^レ才学。源光行誅^レ之。(『醍醐雑抄』)

という具合に、ともに合戦譚の部分の成り立ちを、物語の成立過程の中で別途に加えられたものとして伝えていることは、そのような

経緯を物語っているといえまいか。

そういう意味で、頼朝拳兵譚を語る延慶本等の諸本は、東国の新たな支配者に率いられた勢力の抬頭と、まじかにせまる富士川の合戦に至るまでの緊迫した歴史情勢を、確かにみずえることのできる文学としての骨組を獲得しているといえる。

3・一谷の合戦

さて、語り系諸本は、この頼朝拳兵譚を略述する。もちろん、拳兵譚を語る諸本がそのために物語の進行を多分に煩雑にしている点を正そうとする、すぐれた文芸的な配慮がその主たる要因かも知れない。しかし、それ以上に、語りものとしての『平家物語』の合戦譚が、延慶本の如く歴史的な叙述や記録としての意味を持った合戦譚とは異質なものであったという点が、本質的にあったのではないか。生々しい勝利者のいくさがたりが、語りものとしての『平家物語』の主題として求められなかったこともあるであろう。

琵琶法師という盲目の芸能者が、そのまなかいの暗闇にみた世界は何であるのか。それはまた、『平家物語』の語りもの文芸としての文学性でもあるはずなのである。頼朝拳兵譚の略述は、合戦譚の変貌をそのような意味で象徴する現象であるといえるだろう。

そこで、再び一谷の合戦を素材に、合戦譚の変貌の姿を考えてみ

ることにしよう。

まず、生田の森の先陣として討死した河原兄弟の場合を、覚一本（二度之懸）でみてみよう。

大名はわれと手をおろさね共、家人の高名をもつて名譽す。われらはみづから手をおろさずはかなひがたし。

という、悲壮な覚悟で先陣をきる河原兄弟の死は、「みづから手をおろさずは」功名が己れのものとならない在地小領主の悲劇を典型的に描いている。自己の死を賭して初めて在地での新たな生活が一族に保証されるという、矛盾した中世武士の「生」の一端が活写されているといえよう。ところが、この河原兄弟の討死についても、延慶本の記事は、非常に異なっている。たとえば、

我モくト先陣ヲ心サス兵共多ク有ケル中ニ武藏国住人私
（長門本「私党」）ニ河原太郎高直同次郎盛直兄弟二騎馳来テ
馬ヨリ飛下テ生田社ノ城戸口へ攻寄テツラヌキヲハキテ逆木ヲ
上リコヘテ城中ニ入ケルヲ（カッコ内筆者注）

というように、延慶本は、討死した河原兄弟の心境にはいっさい触れていない。むしろ、延慶本は、河原兄弟を射殺した「究竟ノ馬ノ上手精兵ノ手聞ナリケル」備中住人真鍋五郎助光のみごとな弓のわざに視点が置かれているといつてよい。

川原太郎カ逆木上リコエケルヲ見テサシアラワレテヨク引テ射

タリケレハ弓手ノ草摺ノハツレヲ射サセテヒサスクミテ弓杖ニ
カ、リテ立タリケルヲ弟ノ河原次郎見テツトヨリテ兄ヲ肩ニヒ
キ係テ返ル所ニ助光又ヨクヒイテ二ノ矢ヲ射タリケルニ次郎カ
メテノヒサフシヲ射セテ兄ト一枕^{虫クイ}倒ニケリ真鍋カ下人落合
テ取り押テ河原兄弟二人カ頸ヲ取テ入ニケリ

覚一本にみたような、「下人どもよびよせ、最後のあり様妻子の
もとへいひつかはし、馬にもものらずげぶをはき、弓杖つゐて」源氏
方の先陣に散つた哀れな兄弟の心中やその有様は、延慶本にはみら
れないのである。覚一本は、それに比べて死んだ兄弟の最後の思い
を語らせる。兄弟の心中を一瞬聴く者に開いてみせるという語りも
の独特の文体になっているのである。

同様のことが、薩摩守忠度や備中守師盛・越前三位通盛・大夫業
盛等の討死においてもみられるのである。

忠度の最期はあまりにも有名であり、また、覚一本がきわめて抒
情的な文武両道にたけた理想的武人として忠度を形象していること
については、既に山下宏明氏や北川忠彦氏のすぐれた論考があるの
で、^⑨ここでは詳しく触れない。が、この場合も、延慶本の記事の視
点は、忠度を討ち果した岡部六矢田忠澄の側にあるといえる。延慶
本には、忠度の臨終の念仏や「行きくれて……」の和歌のことは語
られず、また、その結末も、

是ハタカ頸ツト云テ人ニミスレハアレコソ太政入道ノ末弟薩摩
守忠度ト云シ諷人ノ御首ヨト云ケルニコソ始テサトモ知タリケ
レ忠澄兵衛佐殿ニ見参ニ入テ勲功ニ薩摩守ノ年来味知行ノ所五
ヶ所アリケルヲ忠澄ニ給テケリ

と語られているのである。つまり、この合戦譚もまた、本来忠澄の
功名譚としてあったと思われるのである。

師盛の場合も、覚一本にはみられぬ次のような結末が延慶本には
みられる。すなわち、転覆した師盛等の乗った船に攻め寄せた「川
越小太郎重頼カ郎等十郎大夫八騎」等（覚一本は「畠山が郎等本田
次郎、十四五騎」とする）が師盛の首を掻こうとするところであ
る。

擲刀持タル男ノ師盛ノ頸ヲ切ラムトヨテ申ケルハカネ付サセ給
テ候ハ平家ノ一門ニテオワシマシ候コサムメレ名乗セ給ヘ師盛
宣ケルハ己ニ逢テ名乗マシキソ後ニ人ニ問ヘトテ名乗給ワス長
刀ニテ頸ヲ切人ニミスルニ小松殿ノ末ノ御子備中守師盛ト申ケ
レハ吉人ニコソトテ又立還テヲトカヒヲ取テ頸ニツケテソ渡シ
ケル勲功ニ師盛ノ知行ノ跡備中国ヲソ給テケル

右の場合も忠度と同様、敵の名前が判明し、勲功に何々国を賜わ
るといふ、功名譚の話型を備えているのである。

また、覚一本では、

門脇中納言教盛卿の末子藏人大夫業盛は、常陸国住人土屋五郎重行にくんでうたれ給ひぬ

と、簡略に記されている業盛の場合も、延慶本では、常陸国住人比氣四郎五郎の功名譚として語られている。たとえば、その語り出しが、「爰ニ常陸国住人比氣四郎五郎ト云兵アリ」とあることや、また、業盛と五郎とが組み合つて井戸に落ち、四郎が業盛の首を掻くというこの場面が、業盛についてはほとんどふれることなく、四郎五郎の功名譚となっていることなどにも、一連の一谷の合戦の叙述が、東国武士の功名譚という脈絡によって巧に構成されていることが明白になる。そして、この業盛の場合もまた、

十六七許ナル若人ノウスカネヲソ付タリケル是ハ門脇中納言ノ子息藏人大夫業盛ニテソオワシケル哀トモ云ハカリナシ

と、首の主の判明する経過が語られている。忠度・師盛の場合と同様、功名譚にとって首の主が判明するという話型は、現実的な問題なのであって、こうした点からも、延慶本の記事が本来のいくさごたりの伝承を色濃く留めていると判断できよう。もちろん、延慶本の記事が、在地領主層の間で伝承されていた語りをそのまま取り入れているわけではない。ただ、語り本と比較すれば、本来の伝承のもつ功名譚の色彩をより濃く留めているということである。

4・覚一本の世界

以上のように、延慶本における合戦描写は、きわめて古態の伝承を留めていると思われる。そういう意味で、延慶本の合戦譚は、在地領主のリアルな姿を伝えるものであるし、また、様々な合戦譚の集積が、全体として来たるべき中世の到来を、確かな実感を伴いつつ告げるものになっているといえるだろう。そのような方法の中に、すぐれた歴史認識とそれを正確に伝えようとする現実的な精神を読み取ることはできよう。しかし、語りものとしての合戦譚は、また延慶本などとは異なる固有の世界を創り出しているといえるだろう。既にみたように、覚一本における合戦譚は、明らかに勝利者のいくさがたが描くことのできぬ、討ち取られた側からの視点に支えられているのである。たとえば、先述の「忠澄兵衛佐殿ニ見参ニ入テ薩摩守ノ年来味知行ノ所五ヶ所アリケルヲ忠澄ニ給テケリ」といった忠度の最期の結末を、覚一本と比べてみればよい。

「あないとおし、武芸にも歌道にも達者にておはしつる人を、あゝたら大將軍を」とて、涙をながし袖をぬらさぬはなかりけり

討ち果たされた忠度に、中世の人間としての理想的な姿を見出し、てゆく、そうした芸術的な方法や文体の創出は、明らかに忠度の死

に様をくい入るようにして聴いた人々と、その聴衆の芸術的・文学的・人間的要求に応えようとした盲人達の営みであるに違いない。

このような語りもの特有の文体こそが、まさに中世固有の文学世界を創り上げているのである。もちろん、たとえば先述の越中前司盛俊の最期であれば、

越中前司初めはふたりを一目づゝ見けるが、次第にちかうなりければ、馳来る敵をはたとまもゝして、猪俣をみぬひまに、ちから足をふんで立ちあがり、多いといひてもる手をもゝして、越中前司が鎧のむないたをばぐゝとつめて、うしろの水田へのけにつきたおす

といった具合に、主語がいつのまにか転換してしまうといった文章もみられる。^⑩しかし、そうした文章であっても、それを音読するとき、「猪俣をみぬひまに、ちから足ふんで」という箇所は、生き生きとしたイメージによってむしろ自然に主語の転換を可能にしている。語りもの特有の文体とは、このように物語の世界に無限に語り手自身が没入し、かつその世界を、語り手が説明者という立場に再び立ち帰ることによって進行させるといふ、固有の構造に支えられているといえよう。^⑪そうした文体の成立は、当然語り手がすぐれた芸能として語ることを可能にする場の成立なくしてありえないだろう。

室町期における芸能の隆盛と当道座の自立は、そうした語りの場で『平家物語』が文学として成熟することを可能にしたのである。

確かに盲人達は、当初呪術的な目的でもって『平家物語』の管理者となつたのであろう。^⑫亡霊の怨念を語り鎮めることのできるシャーマン特有の職能が、『平家物語』の管理と結びつく論理については、今論じることができない。しかし、呪的職能民であつた彼等盲人の集団は、中世社会の発展の中で座を形成することにより、すぐれた芸能集団へと成長してゆく。亡霊のことはを語るといふ彼等特有の語りの機能は、その成長の中で物語を聴く者にありありとその世界をイメージさせるという語りの方法へと上昇していったはずである。盲人史や当道座の成立等、今後究明すべき点が多くあるにせよ、彼等特有の生理的・職業的な語りの機能が、芸能の方法に転換してゆくことは想定されねばならないだろう。そうした点については、課題として稿を新たにせねばならないが、ともあれ芸術集団としての当道座が自立すること、それはまさに『平家物語』の成立と不可分の関係でなければならぬ。

討ち果たされた側に、語りの視点を据えるという、語り本特有の発想は、まさにそのような盲人の語りの本質に根ざしたものであるといえよう。そして、様々な人々の死に、人間の根源的な「生」の全体を凝縮させてゆくという覚一本の合戦譚の方法は、それ故、殺

戮のくり返しからしか開かれることのない中世という歴史の厳しさとはかなさを、その人々の運命の中に、ありありと見えさせるものとして創り出してゆくのである。

寛一本の評価は、そのようにかくれた盲人の営みとしての語りも固有の文芸的な方法と価値とを、もっと追いつめる中で見極めてゆかねばならないはずである。

(注)

① 『平家物語』の合戦描写が、すぐれた叙事詩的達成をみせている点については、佐藤輝夫氏の研究に詳しく論じられている。

佐藤輝夫氏「西欧叙事文学との比較を通してみた『平家物語』」(『平家物語講座・第一巻』所収)、「宇治橋合戦の語りもの的構造」(『軍記物とその周辺』所収)、『ローランの歌と平家物語』

② 富倉徳次郎氏『平家物語全注釈・下』

③ 市古貞次氏校注『日本古典文学全集・平家物語・(一)』本文頭注

④ 武久堅氏『『畠山物語』との関連—延慶本平家物語成立過程考—』(『文学』第四十四卷十月号所収)

⑤ 山下宏明氏も指摘するように、たとえば「源平闘諍録」における記事が、千葉氏によって記されているであろうことも、関東の在地に挙兵にまつる多様ないくさごとりが伝承されていたことをうかがわせる。

山下宏明氏「源平闘諍録の研究」(『平家物語研究序説』所収)

⑥ 武者小路稜氏「いくさごとりについて」(『日本文学』第四巻一号所収)

⑦ 水原一氏『平家物語の形成』その他、砂川博氏も在地の武士や民間の宗教家の語り、が、合戦譚成立の基盤になっていることを論じている。

⑧ 「延慶本平家物語俱利伽羅落の形成」(『文学』第四十三巻七号所収)「義仲拳兵説話の生成—延慶本平家物語の場合—」(『文学』第四十四巻五号所収)

⑨ 益田勝実氏「語りもの文芸の社会性」(『国文学』第五巻八号所収)

⑩ 山下宏明氏「平家物語の抒情的側面をめぐって」(『軍記物語と語りもの文芸』所収)

⑪ 北川忠彦氏「忠度像の形成」(『国学院雑誌』昭和五十年九月号所収)

⑫ このような『平家物語』の語りもの特有の語法については、『日本古典文学大系・平家物語・上』の解説に詳しい。

⑬ 杉山康彦氏「平家物語における語り主体の位置—その思想と文体—」(『文学』第三十三巻十二号所収)

⑭ 渡辺貞磨氏「平家物語」の作者達—盲人との関係について—」(『大谷大学文芸研究会・文芸論叢』第三号所収)

その他、早く筑土鈴寛氏「平家物語につきての覚書」(『復古と叙事詩』所収)以来、『平家物語』の成立を怨霊鎮魂とかかわらせて考える研究は、重要なものと考えられる。

角川源義氏「語り物文芸の発生」

福田晃氏「軍記物語と民間伝承」

五来重氏「高野聖」など。

(付記)

頼朝拳兵譚と『吾妻鏡』との関連については、本稿ではふれなかったが、今後検討を加えたい。また、本稿の校正の時点で、服部幸造氏の論考「軍語り」と平家物語—「の谷合戦をめぐって—」(『日本文学』第二十七巻一号所収)が発表された。本稿とあわせてぜひ参照されたい。